

キリスト教に思想的関心を持ちつつ一九七〇年代の半ば頃に大学に入学したわたくし書評者世代の人間にとって、田川建三は暑い時代 - 七〇年代半ばには収束に向かいつつあった学生運動や教会紛争の時代 - を象徴する人物の一人として存在していた。その発言は、『批判的主体の形成』(一九七一年)や『イエスという男』(八年間かけて一九八〇年に出版)といった著書を通し、今も当時の読者の心に残っている。今回ここで取り上げるのは、七〇年代の著作より三十年を経て出版された田川の最新著『キリスト教思想への招待』であり、この三十年の歳月を振り返りつつ論評を行いたい。

三十年前の田川の読者がこの近著を読んで最初に感じるのは、三十年を経た思索の一貫性と同時にその変化であろう。七〇年代の田川は、批判、逆説、反抗といった言葉を焦点として、「宗教批判から現代批判へ」というベクトルが専門の新約学研究からシモーヌ・ヴェイユ論までを貫いていた。この点は、この三十年の歳月の中でも一貫しており、「今後の自分の仕事について、多少展望しておきたい。自分としては相変わらず、宗教批判から現代批判へ、という運動を継続するのが自分の課題であると思っている」との『批判的主体の形成』のあとがきの言葉は、『キリスト教思想への招待』の第三章「彼らは何から救われたのか」における次のような主張へとまっすぐに通じている。「キリスト教は、ローマ帝国の支配の宗教になる以前は、ほかの人たちから、ずっと、無神論と呼ばれていた。当然のことである。これまでの諸宗教なんぞ、そこで説かれる神々への信心なんぞ、その神々の礼拝、その神々に対するあらゆる祭儀なんぞ、すべて無益である、とやめてしまった人たちの集りなのであるから。」(二二二頁)、「人類はそろそろ宗教そのものから解放されようではないか、と言える段階にさしかかってきたのである」(二四〇頁)。

このように田川において宗教批判・キリスト教批判という姿勢には基本的に変わらないものの、今回の『キリスト教思想への招待』では、そのニュアンスに一定の変化が見られる。それは、「横道だが」と言いつつも、現代の日本とアメリカにおける危険な保守化に対して繰り返される批判との関連での、キリスト教への肯定的な言表となって現れている。一九九〇年代以降の、改憲論を含む日本における保守的論調の中では、キリスト教や一神教への意図的(?)誤解とセットの形で、戦後の民主主義的な諸価値への露骨な批判がなされている。こうした状況の大きな転回の中では、おそらくキリスト教をもっぱら批判してそこから社会批判を展開するよりも、キリスト教や西欧世界の継承すべき「すぐれた遺産」を論じることを通して日本社会の保守化の現実を批判する方が、より重要な意味を持つ。こうした判断が田川におけるキリスト教を論じる際のニュアンスの変化となって現れているというのは、書評者の深読みであろうか。ともかくも、田川自身の意図は次のようにきわめて明瞭である。

「以前『イエスという男』を書いた時には、あのたぐい稀なる人物のすごみを、キリスト教が「キリスト」信仰の中に消し去ってしまうことがいちいち目について、キリスト教に対してどちらかというところかなり否定的な面ばかりを強調した。しかし、後のキリスト教がイエスとは違うにせよ、キリスト教はキリスト教なりに、いろいろすぐれた遺産を残してくれているのも事実である。そのことは、十分にお伝えしなければならない。敢えて、「キリスト教思想への招待」を書こうと思った理由である。」(iii 頁)

田川のキリスト教思想論は、現代日本の保守化の中で誤解に満ちた露骨なキリスト教批判に抗する必要を感じている者にとって、共感できる点、参照すべき点を多く含んでおり、以下紙面が許す範囲で、こうした点を中心に紹介することにしたい。なお、本書は先に言及した第三章のほかに、「第一章 人間は被造物」、「第二章 やっぱり隣人愛」、「第四章 終れない終末論」から構成されているが、とくに最初の二つの章を中心に内容を紹介し、第四章は批判的コメントとの関連で簡単にふれることにする。

第一章のテーマは創造論である。田川は、ミヌキウス・フェリクス『オクタヴィウス』を手がかりに、正統キリスト教とグノーシス主義との闘争から「シュヴァーベンの十二条」まで、様々な素材を用いつつ、論を進めて行く。そのポイントは次の通りである。

「キリスト教の創造信仰は、一方では明瞭に、ユダヤ教正典たる旧約聖書の創造信仰の継承である。他方では、しかし、ストア派の汎神論的な創造信仰が、天文学の教科書を通じてギリシャ語のユダヤ教に継承され、それが更に最初期のギリシャ語ユダヤ人キリスト教に継承されたのである。」(四八頁)、この創造信仰に基づいて、「自然に対して感謝して接し、自然の恵みを大切にするという姿勢がキリスト教ヨーロッパにおいて生き生きと生きている」、「我々が学ぶに値するのはこの点である。」(七五頁)。

この連関(横道?)で現代日本への鋭い批判 - 「「一元論」の宗教があるから戦争をするのだ、などという妄想」(六七頁) - がなされる。「西洋人が、西洋人だけが、自然と人間を対立させ、自然を征服しようとした、などというのが事実をまったく無視した偏見」(八九頁)であって、このような「偏狭な民族主義」は「嘘みたいな無知、嘘みたいな偏見」、「国粋主義の問題」(九五頁)であるというのはその通りである。しかし、こうした議論が幅をきかせているのが日本の環境論(?)の実態の一面ではないだろうか。

次に第二章であるが、ここでは、「背教者ユリアノス」の手紙(書簡84。キリスト教批判者による「確かな証言」)から、キリスト教の何が人々を引きつけたのか、キリスト教の長所はどこにあるのかが、論じられる。ここでも議論は、使徒行伝の「原始キリスト教の共産主義」(「典型的な消費共産主義」)やイエスの「葡萄園の日雇労働者の賃金」の譬え話(「能力に応じて働き、必要に応じて消費する」)から、「オスピス、シュピタールの歴史」まで、豊かな材料を使って進められる。田川が論じたかったのは、「使徒行伝の「理想」から、四世紀のキリスト教会の実態まで、一つの非常に大きな飛躍がある。自分たち小人数の仲間内の助け合いの倫理から、世の中すべての人々へと眼を向けていく助け合いへと。前者は、所詮、小さな宗教教団の仲間内の問題である。後者になると、社会全体をつくっていく力となる」(一四三頁)ということ、ここに多くの人々がキリスト教を支持することになるキリスト教の長所が存在し、この伝統から「キリスト教西洋社会は失業保険から健康保険やら、その他さまざまな社会保障制度を発展させてきた」(一五三頁)という点である。もちろん、田川はキリスト教の長所を述べる際も、キリスト教批判という調味料を加えるのを忘れない。「キリスト教は愛の宗教です。というのは、建前にすぎない。表向きの看板である。この種の表向きの看板には、嘘と偽善が常につきまとう。しかし、それでも、彼らはこの看板を下ろすことはしなかった。こういう看板をかけている限り、自分たちは愛の宗教なんです、と言い続けている限り、なるべく忠実にその看板を実現しようとする人たちが、常にキリスト教の内部に出現するものだ。そしてそれがキリスト教を支える力になってきた」(一三一頁)、と。更に、次の言葉もじっくり味いたい。

「それらの金持自身もまた、同じ価値観を共有していたのである。ある程度以上多くの収入がありすぎたら、それはもう、本当は自分のものであってはならない。自分のものであってはならないのであれば、「みんなの役に立つこと」に寄進しようということになる。中世キリスト教社会は、そういう価値観を人々の間に育てていた。」(一八五頁)

以上のように、キリスト教批判を基調にしつつも、田川はキリスト教の長所を鮮明に描き出しており、その手並みは鮮やかである。しかし、やや疑問な点も存在するので、最後に第四章について批判的コメントを行うことによって、この書評を閉じたい。田川は、ヨハネ黙示録は、黙示文学叙述という「一種の文学遊び」を行いつつ、貨幣を基礎にしたローマ帝国支配による諸民族の抑圧の現実を鋭く捉えているという点から説得的にその思想を論じている。だが、「嘘みたいな誤解」(二五七頁)を指摘する際の田川の議論には言葉足らずの感がある。それは、「この文書の背景をローマ帝国によるキリスト教の弾圧という点からのみ見ようとするのは、間違っている。しかし右の嘘の最たる点は、だから仲間うちにしか通じない暗号のような隠語で書いた、という点である。黙示文学をある程度読みなれている読者ならば、むしろ、こんなわかり易い文学作品はめずらしい、とさえ言えよう。」(二五八頁)という指摘である。確かに、ヨハネ黙示論が「キリスト教徒だけを考えていたわけではないこと」、「ローマ帝国支配によって抑圧、弾圧されたすべての人間を頭に置いている」(二七〇頁)ことは明瞭であるとしても、しかし描かれた殉教者にはキリスト教徒も含まれており(二八一頁)、黙示録の著者の関心がキリスト教徒の殉教者にあること自体は否定できないのではないだろうか。田川は「キリスト教徒だけを考えていたわけではない」としてキリスト教に対するヨハネ黙示録の関心をことさらに相対化しようとしているが、それがヨハネ黙示録自体の意図と微妙な齟齬を来しているということはないだろうか。また、「仲間うちにしか通じない暗号のような隠語」という通説に問題があるとしても、「この六百六十六という数字は、有名である」(三〇一頁)、「少なくともこの著者の周辺では」(三〇二頁)とあるように、ヨハネ黙示録が著者の周辺で通用していた一種の暗号を使っていることまでも否定はできないだろう。田川はヨハネ黙示録を自らの立場に引き寄せて解釈しすぎているというのが、わたくしの印象である。こうした点については、すでに予告されている『新約聖書概論』(仮題)での詳細な議論を期待したい。